

カモシレナイとノカモシレナイについて

—推論の方向性と事情推論—

幸松英恵

キーワード：カモシレナイ、ノカモシレナイ、ノダ、推論、事情

1. 研究の目的

事情推量を表すノダロウは、基本的に、ダロウへの置き換えができないことが知られている¹。

- (1) …ビルの四階にあるホールへ上がっていきこうとすると、入口のコーヒー・ショップから声をかけられた。
そこにはカウンターでコーヒーを呑んでいるエディと利朗がいた。コーヒー好きのエディが利朗を誘ったのだらう。【一瞬の夏】²
- (1)' …ビルの四階にあるホールへ上がっていきこうとすると、入口のコーヒー・ショップから声をかけられた。
そこにはカウンターでコーヒーを呑んでいるエディと利朗がいた。#コーヒー好きのエディが利朗を誘ったのだらう。((1)の書き換え)

(1) は一人称小説の地の文から抜き出したものである。「私」が遭遇した場面である「そこにはカウンターでコーヒーを呑んでいるエディと利朗がいた」という描写があったのち、「コーヒー好きのエディが利朗を誘ったのだらう」というノダロウ文が続いている。いわゆる「神の視点」で書かれた小説でなら「コーヒー好きのエディが利朗を誘ったのだ」という解説がなされたかもしれないが、ここでは主人公である「私」が眼前の状況から事情を推論しつつ〈説明〉をしている文脈であるため、ノダではなくノダロウが選択されている。

このように、与えられた事態に対して、それがなぜ起こったのか、それが何を意味しているのかを推論した結果を語る際にはノダロウが選択され、ダロウに置き換えると非文になる((1)')³。本稿筆者は、こうしたノダロウを事情推量の形式であると考え、(いわば)単純推量を表すダロウとは異なるものと考えてきた(幸松 2012, 幸松 2015 など)。

定義や解説のしかたに多少の違いがあっても、ダロウとノダロウの対立そのものは広く知られた言語事実であり、例えばグループ・ジャマシイ(1998)による『教師と学習者のための日本語文型辞典』を見ると、ダロウとノダロウはそれぞれ別個の文型項目として取り出されている。同書

¹ ノダロウ文の中には事情推量を表さない文もあり、ニュアンスの差異に目を瞑ればダロウへの置き換えが可能である。以下、本稿の中で特に指定がなくノダロウと述べる場合は、事情推量を表すものに限って指すこととする。事情推量を表さないノダロウについては幸松(2015)で論じている。

² 以下、文脈の中に与えられた、事情を推論される対象になる事態には波線を付す。

³ (1)' は、一文内で見れば文法的な文であるが、コンテクスト(連文関係)の中に置いた時に不自然になるという意味で「#」を付している。非文とまでは言えないまでも不自然だと思われる文には「?」を付す。

はノダロウについて「[「のだ」と「だろう」が組み合わせられた形 (p.468)]」であり、意味としては「理由や原因についての推測など、ある出来事についての話し手の状況判断がふくまれる (p.469)」と解説している。

ところで、ダロウ以外の推論を表すモダリティ形式の中で、ノが前置するか否かで意味的な対立を持つものとしてカモシレナイとノカモシレナイがある⁴。

(2) それでも勇を鼓して明けてみると、中は鞆や蒲団が雑然と置いてあるばかりで人影はなかった。ついでに隣の部屋も覗いたが、振り向いた顔の中に藤木はいなかった。矢代もないのだから、或いは二人で散歩に行ったのかもしれない。【草の花】

(2)' それでも勇を鼓して明けてみると、中は鞆や蒲団が雑然と置いてあるばかりで人影はなかった。ついでに隣の部屋も覗いたが、振り向いた顔の中に藤木はいなかった。??矢代もないのだから、或いは二人で散歩に行ったのかもしれない。((2) の書き換え)

(2) も一人称小説から抜き出したものである。「私」が「藤木と矢代が部屋にいなかった」という事態を目の当たりにし、その事情について「二人で散歩に行ったのかもしれない」と推論したことが描かれている。前述のノダロウと同様、事情の推論であることは確かであるが、こちらの場合、カモシレナイへの言い換えは文法的適確性を失うとまでは言い難いように感じる。ダロウとノダロウに見られる鋭い対立関係に比して、カモシレナイとノカモシレナイの意味的な対立の度合いはより鈍いものであると言えるのだろうか。次の例ではその曖昧さが顕著に現れている。

(3) …暴風雪とまではいかなかったが、あたりが暗くなり、森林が鳴り出した。「海が見えなくなった」と宮村健が突然叫んだ。はっきりした声だったが、こんな場合に宮村がなぜそんなことをいったのかわからなかった。あるいは宮村が幻視の中に神戸の海を見ていたのかもしれない。彼は海を見ながら、神戸アルプスを歩いていたのかもしれない。【孤高の人】

(3) は、登山でパーティーを組んでいた相手（宮村健）が遭難して幻視を見、「海が見えなくなった」と叫んだことを受けて、主人公が「宮村がなぜそんなことをいったのか」を推論している場面である。つまり事情を推論している文脈であるにも関わらず、一つ目はカモシレナイ文が、二つ目はノカモシレナイ文が用いられている。

こうした使用状況が反映されているのか、前述したグループ・ジャマシイ (1998) では、ノカモシレナイを一個の文型としては取り上げていない。カモシレナイについて「話し手の発話時における推量を表す、「その可能性がある」という意味 (p.85)」と説明し、例文にカモシレナイ文とノカモシレナイ文を併置している。ノカモシレナイは「[「のだ」に「かもしれない」が付いたもの (p.85)]」とのみ記述するに留まり、意味の違いについては言及がない。

以上の背景を踏まえて、本稿では、推論の種類に関してなされた先行研究を整理した上で、先に議論が進んだダロウとノダロウをめぐる論考と対照しつつ、カモシレナイとノカモシレナイの用例を分析し、両者の意味的な対立の実態を明らかにしていく。

⁴ ノが前置するか否かで形式的対立を持つ認識モダリティ形式としては、他にもニチガイナイがあるが、一般に、ノの有無による意味的な対立はないと言われる（庵ほか 2000:275 など）。

2. 推論の方向性と〈説明〉の関係

2.1 先行研究

ダロウをはじめ、カモシレナイ、ニチガイナイ、ヨウダ、ラシイなど認識的モダリティ形式による推論の種類⁵として「結果（帰結）の推論」と「原因（理由）の推論」の二種があること、さらにその対立に〈説明〉のノダ⁶が関係してくることが指摘されたのは最近のことではない。おそらく推論の種類と〈説明〉の関係について、明確な形で取り上げたのは奥田（1984:60）が最初であろう。

「…述語が「のだろう」をともなう、おしはかりの文が説明的にはたらくとき、おしはかりの根拠をつとめる事実あるいは判断は、かなり忠実に段落のなかにあたえられている。この種の段落では、一方には先行する文にえがかれている出来事の理由なり原因、あるいは意味をあきらかにする説明の過程があつて、他方にはその、先行する文にえがかれている出来事を根拠におしはかりの想像なり思考の過程があるが、これらの、ふたつの、方向のことなる過程は同時に進行している。つまり、ことの原因なり理由、あるいは意味をあきらかにするために、説明がもとめられるわけだが、その原因、理由、意味をつきとめるため、おしはかりの過程が進行する。このとき、先行する記述的な文にえがかれている出来事は、おしはかりのための根拠をつとめる。ここでは《おしはかりの構造》と《説明の構造》とがひとつにもつれあっている。」（下線部は本稿筆者による）

奥田（1984）は、ノダロウが表す推論と〈説明〉の関係を上のように述べて、いくつかの用例を挙げて検討している。以下に示す（4）では「部屋に見えるあおい灯」を根拠に「兵隊が一人死んだ」と原因を考える推論の過程があり、同時に「なぜあおい灯がついているのか」を明らかにしようという説明の過程もある、ということになる。

（4） まえの屍室には今夜もあおい灯がついている。また兵隊がひとり死んだのだろう。（奥田 1984:60）

奥田（1984）では、日本語の文（典型的には動詞文を中心とする「ものがたり文」）を「いいきりの文」か「おしはかりの文」かという対立と、「記述の文」か「説明の文」かという対立の、2つの軸で4つに分類している。ダロウはおしはかりによって間接認識された事態を記述する文であり、ノダロウはおしはかりによって間接認識された事態を説明する文である。ノダとノダロウは〈説明〉という枠組みで共通しながら、〈おしはかり〉であるか否かで対立するものであり、ダロウとノダロウは、〈おしはかり〉という枠組みで共通しながら〈説明〉であるか否かで対立する。

一方、叙法形式に関する一連の研究がある大鹿（1994,1995,1999）は、異なる見方をする。大鹿

⁵ 本稿では「推量」という用語をダロウの意味を表すものとして使用する。「推論」は、ダロウによる「推量」のほか、カモシレナイやニチガイナイによる「蓋然性判断」、ヨウダやラシイによる「兆候性判断」などを全て含めた広義概念として用いる。ただし先行研究を引用、解説する際には、それとわかるように先行研究の用語法に従う。

⁶ ノダは一般に〈説明〉のモダリティとされる（寺村 1984, 奥田 1990, 日本語記述文法研究会編 2003 など）。本稿では文法用語として「説明」を用いている場合は〈説明〉と記す。

(1994)においてダロウ文というのは「ある事態が事実である、真である」ことを推量する文である。間接的に認識された内容を事実として述べる際に用いられるのがダロウであるという。その上で、大鹿(1994:2)では次のようにダロウとノダロウを比較している。

(5) (車を運転していて渋滞に遭遇する)

この先で工事をしているのだろう。(大鹿 1994:2 ④)

この先で工事をしているのだろう。(同上 ⑤)

大鹿(1994)によると「この先で工事をしているのだろう」とは言えても「この先で工事をしているだろう」と言えないのは、この文が原因や理由の推量を表しているためだという。原因・理由というのは論理的にも時間的にも現実の事態より先行する出来事である。現実の事態を帰結・結果として捉え、その理由・原因を導く推論というのは、「想定する」ことはできても、「事実を生み出す」ことにはならない。先に述べたように、大鹿(1994)においてダロウは事実を主張する文であった。したがって、ダロウを用いて原因や理由を述べることができないのだという。

では「想定された理由や原因」を述べたい場合はどうするかというと、事実として述べなければよいので、「可能性認識」であるカモシレナイや、「確実性認識」であるニチガイナイを使えばよいという。ノダロウが可能になるのは、この形式が「想定された事態が真である」ことを言明しているのではなく、「想定された事態が、理由や原因として真である」という述べ方をしているためだとする。具体的に言えば、コピー機がピーピーと音を鳴らしているのを前にして「紙がつまったのだろう」と述べるのは、紙がつまったかどうかについて真偽判定しているのではなく「紙がつまった」ことが現実の事態と何らかの関連性を持ったものとして推論されていることになる。ノダロウ形式の中に含まれる準体助詞ノは前接事態を体言化するものであり、用言の体言化とは用言の持つ叙述性を捨象させるものであるから、叙述における真偽判断が棚上げされるのだという。

木下(2010:92)では因果関係を「p(原因)であればq(結果)」というように事態が存在、生起するという、事態のあり方(存在や生起の仕方)についての認識の型」と定義し、その因果関係には、時間的な前後関係を持つ出来事間の関係だけではなく、時間的な関係によらない論理的な関係の両者を含める。そして原因・理由から結果・帰結を推論するタイプを「結果推論」、反対に、結果・帰結から原因・理由を推論するタイプを「原因推論」と呼んでいる。木下(2010:91-92)では、真偽判断を表すモダリティ形式には、「原因推論を得意とする形式とそうではない形式がある」と述べていて、ノカモシレナイが原因推論を表しやすいのに対してカモシレナイの方は原因推論を表しにくいと指摘しつつ、どのような条件であればカモシレナイが原因推論を表しやすくなるのかについて論じている。

以上、奥田(1984)、大鹿(1994)、木下(2010)を概観した。推論の方向性と〈説明〉の関係に注目して先行研究を整理すると、奥田(1984)では、「説明の構造」と「おしはかりの構造」が同時に進行するのがノダロウ文であるとされていた。ノダロウが原因や理由の推論を表すのは、説明されるべき事態を前にして、それがどうして起こったのか、それが何を意味しようとしているのかを説明しようと推論されるからであった。

大鹿(1994)と木下(2010)は認識的モダリティ形式(叙法形式)による推論の方向性の偏り

について論じ、ノダロウ（大鹿）やノカモシレナイ（木下）がそれぞれ原因推論を表しやすいことを指摘しているが、〈説明〉のノダと結びつけた記述はしていない。大鹿（1994）では、ダロウの前に準体助詞ノがつくことで事態が体言化され、「(という) ことだろう」のような語り方に変換されるのがノダロウであり、命題の事実性そのものではなく、2つの事態の結びつきの真偽を語る文になると考えていた。実は、この記述の「(という) ことだろう」の部分を「(という) ことだ」という断定形に置き換えると、これはそのまま「何故ノダが〈説明〉という機能を持つのか」を解説していることになる。つまり大鹿（1994）では〈説明〉という用語こそ用いてはいないが、2つの事態を結びつける原理にノ（ダ）の機能を想定するのは、ノダという形式が〈説明〉という機能を獲得している理由の記述と重なって見える。一方、木下（2010）の研究は、どのような場合にカモシレナイが原因推論を表し得るのかという条件を明らかにすることに徹して、なぜそのように推論の方向性に偏りが出ることかという理由についての論考はない。

2.2 本稿における考え方

本稿筆者はノダ文をめぐる言語現象について研究を続けてきた立場から、推論と〈説明〉の関係について、次のように考える。

ノダ形式の発生は江戸期であり、活発に使われるようになったのは江戸後期以降であると言われる⁷。準体助詞のノに断定の助動詞ダが後置した形式が一つの助動詞のように文法化したのが現在のノダであると考えるのは定説と言えるが、ノダの各用法、及び周辺形式における文法化の度合いはそれぞれであり、全てが〈説明〉のパラダイムに入るわけではない⁸。

例えばノダの周辺形式であるノデハナイやノカは、前接部分を体言化し、「(という) ことではない」という語り方にするための〈ノ+デハナイ〉であり、「(という) ことか」という問い方にするための〈ノ+カ〉であろう。ノデハナイやノカは否定や疑問のスコープを広げる機能に着目されがちであるが、それを支える構文的根拠は、準体助詞のノで前接部分を体言相当にすることで、拡大名詞文のような構造になっているという事実である。「(—ということは) ~ (という) ことではない」と否定したり、「(—ということは) ~ (という) ことか」と疑問したりするため、「(—ということは) ~ (という) ことだ」という肯定・断定のノダによる〈説明〉の機能と重なる部分が出てくる。

これと同じことがノダロウに対しても言えるのではないかと、というのが本稿筆者の見方である。すなわちノダロウは、ノによって前接部分が体言化され、拡大名詞文のようにになっている。「(—ということは) ~ (という) ことだろう」とでもパラフレーズできる意味になっていることから何らかの事態を受けていることが暗示されるのだが、これが2事態を結びつけて〈説明〉するノダの機能に重なる。これは大鹿（1994）によるノダロウの見方に近いと言えるが、結果として生じている機能を共時的な視点で見れば、奥田（1984）が図示している通り、〈説明〉の文を作る「いいきり形」がノダであり、「おしはかり形」がノダロウであるという考え方にも賛同できる。

ところでこのノダロウについて、本稿筆者が原因推量とはせずに事情推量だとするのはノダロウによって推論される内容が常に原因や理由になるとは限らないからである。

⁷ 幸松（2020）では、江戸後期の江戸語におけるノダの使用状況に関して調査を行なっている。

⁸ ノダは一般に〈説明〉のモダリティと呼ばれるが、それ以外の用法を持つノダ文があることについては幸松（2020）や幸松（2022）で論じている。

- (6) パラパラと音が聞こえる。雨が降っているのだろう。(本稿筆者による作例)
(7) 雨雲が広がっている。もうすぐ雨が降り始めるのだろう。(同上)

(6) では知覚によって捉えた音の実態を明らかにしようという推論がなされており、与えられた事態と推論された事態の生起は同時的である。現実には観察される表層的な出来事(音が聞こえる)の実相的なあり方(雨が降っている)を推論したものであり、原因の推論ではない。(7) では、眼前に広がる雨雲の存在を、今後生起しそうな事態(降雨)の兆候と見ている。出来事間の関係で言えば「雨が降る」というのは原因ではなく、むしろ帰結である。定義次第ではこうした推論もなお「原因推論」の一種と言えるのかもしれないが、そのような用語法は一般的ではないだろう。現実には生起した事態を知覚した上で、「(—ということ)は～(という)ことだろう」という述べ方をすることは、傾向として原因推論になることが多いというだけであって、常にそうとは限らないのである。このような見方は、推論の方向性と時間的な継起順序とを結びつけて考える大鹿(1994)や木下(2010)とは異なる⁹。

以上、推論の方向性と〈説明〉の関係について先行研究を紹介し、本稿の考え方を述べた。ノダロウは、拡大名詞文とも言える構造になっていることから与えられた事態の事情について推論した結果を述べる形式になっており、事情を〈説明〉するノダのパラダイムとも考えられる。そしてこの場合の「事情」とは、所与の事態の原因・理由には限られないことを述べた。次節以降、本題であるカモシレナイとノカモシレナイについて、先行研究を検討し、実際の用例分析に入っていく。

3. カモシレナイをめぐる学説

3.1 カモシレナイの意味・用法

カモシレナイは副助詞「か」に副助詞「も」が後置し「知れない」が付いた形が一つの助動詞として文法化したものである。近年になって成立したことから、山田文法の「副語尾」、時枝文法の「辞」の中には見られないのはもとより、金田一(1953)や渡辺(1953)が挙げる「助動詞」の中にも入っていない¹⁰。国立国語研究所編(1951:11)の用例集『現代語の助詞・助動詞一用法と実例一』でも、文法化した一助動詞として立項されておらず、副助詞「か」の複数ある用法のうちの一つとして次の2例のみ示されている。

- (8) それは自由の古典的概念であると言ってもよいかも知れない。(国立国語研究所 1951:11)
(9) 次期国会までに民自と民主犬養派との合同はあり得るかもしれないが、～(同上)

⁹ 木下(2010)では「無理な運転をする→事故が起きる」等、動詞文によって描かれる、時間性を持つ出来事間の因果関係のほか、「女の子は甘いものが好きだ→知子も花子も甘いものが好きだ」のように一般判断から個別判断を導く関係も射程に入れているが、時間性を持つ事態関係の場合は全て、与えられた事態に先行する原因・理由になっているものを挙げている。

¹⁰ 本稿筆者が明治、大正、昭和初期の使用について『日本語歴史コーパス』(CHJ)を用いて調査したところ「も」が入らない「Vか知れない」「Vかわからない」なども一定数見られた。終止形では「かも知れぬ」、連体形では「かも知れざる」といった古形も使用されていた。

現在、カモシレナイは一般に「可能性の存在を表す形式」とされるが、この「可能性」という用語に結びつけてカモシレナイを取り上げたのは寺村（1984）である。寺村（1984:235）ではウ・ヨウ、ダロウ、マイに続く「概言のムード形式」としてカモシレナイを扱い、「助詞二つと動詞の否定形が結びついて一語の助動詞化した、いわゆる組み立て式の助動詞」であるとした。「ダロウと同じく、自分の主観による単純な推量を表す。ダロウとの違いは、その推量の妥当性についての確信の度合いが低いこと」であるカモシレナイの例文として、寺村（1984:235）は以下のような文を挙げている。

- (10) その後、台風はまっすぐ中国東北区方面に向かう見込みだが、ひょっとすると向きを次第に東寄りに変え、北日本に近づいてくるかもしれない。（寺村 1984:235 (31)）

寺村（1984）によって、カモシレナイの確信度の低さが「「…の可能性もある」というぐらいの気持ち」と表現された後、この「可能性の存在を語る」形式という言説が定着していく。仁田（2000:130）は「蓋然性判断」のモダリティのうち、「カモシレナイ」は「可能性把握」を表しているとし、宮崎ほか（2002:143）は「カモシレナイ、ニチガイナイ、ハズダ」を「可能性、必然性」を表すモダリティ形式であるとし、日本語記述文法研究会編（2003:153）は、カモシレナイについて「話し手がその事態を可能性があることと認識していることを表す」としている。日本記述文法研究会編（2003）の例で見ると、次の文は、それぞれカモシレナイを用いることによって「第1志望校に合格できる可能性」「今日雨が降る可能性」「明日家にいない可能性」を話し手が認識していることを表すという。

- (11) この調子でがんばれば、第1志望校に合格できるかもしれないぞ。（記述文法研究会 2003:153 (1)）
(12) [ふとんを干そうとしている人に] 今日は雨が降るかもしれないよ。（同上 (2)）
(13) A 「明日お邪魔してもいいですか？」
B 「明日は家にいないかもしれません」（同上 (3)）

以上、カモシレナイは比較的最近になって一つの助動詞（モダリティ形式）として文法化した形式であるということ、「可能性の存在を語る形式」という見方が定説的になっていることを確認した。

3.2 カモシレナイとノカモシレナイの関係について

カモシレナイとノカモシレナイについては、管見の限り、ダロウ・ノダロウに見られる関係性と同様であると指摘されいくつかの例が挙げられている程度であり、詳細な分析は殆ど見当たらない。まず、日本語教師向けの指導書である、庵ほか（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』を参照すると、ダロウ・ノダロウとカモシレナイ・ノカモシレナイの対立について、ノダによる「関連づけ」の機能について解説する節で取り上げられている。以下、該当部分を引用する。

(14) 田中くんからいっしょに帰ろうと誘われたが、忙しかったので断った。彼は一人で帰ったのだろう。

(庵ほか 2000:274 (1))

(15) 日曜で会社は休みのはずだが、吉田くんは電話に出ない。洋子さんとデートしているのかもしれない。

(庵ほか 2000:274 (2))

「(1) (2) (※本稿筆者注：上例 (14) (15)) のようにモダリティ表現 (だろう、かもしれない) の前に「の」が付いている場合があります。この場合、これらは意味的に「のだ+モダリティ表現」と考えられます。例えば (2) は (2)' のような構造を持っています。

(2)' (吉田くんは) 洋子さんとデートをしているのだ+かもしれない。

こうした場合の意味は「のだ」の意味と、モダリティ表現の意味を合わせたものとして考えられます。(p.274)」

日本語文法学会編 (2014) による『日本語文法事典』には、これとほぼ同様の記述が見られる。宮崎和人氏の筆による「推量」の項目では、次のように解説されている。

「推論の過程－推量の根拠となる事実や判断が先行する文に描かれているとき、「この映画はおもしろい。ヒットするだろう」のように、推論の過程が表現される。この場合、根拠となる事実や判断を原因や理由として、ダロウは、その結果や帰結を推量する。ダロウが説明の形 (ノダ) をとったとき、この関係は逆転し、「彼女の様子は変だ。何かあったのだろう」のように、推量の根拠となる事実に対して、ノダロウはその原因や理由をつきとめるために推量する。カモシレナイとノカモシレナイの関係もこれと同様である。(p.327)」(下線部は本稿筆者による)

上の2つの文献は、それぞれ教師向け指導書と文法事典であった。論文の中で分析されたものとしては木下 (2010) がある。木下 (2010:92) によると、カモシレナイは (16) のような結果推論の文脈で使われ、ノカモシレナイは (17) のような原因推論の文脈で使われるが、お互いに置き換えると、(18) (19) のように不自然になるという。

(16) (電車の運行がとまったことを根拠に) 改札が人であふれかえるカモシレナイ。(木下 2010:92 (1))

(17) (改札で人があふれかえていることを根拠に) 電車の運行がとまったノカモシレナイ。(同上 (2))

(18)? (電車の運行がとまったことを根拠に) 改札が人であふれかえるノカモシレナイ。(同上 (3))

(19)? (改札で人があふれかえていることを根拠に) 電車の運行がとまったカモシレナイ。(同上 (4))

こうして木下 (2010) では、カモシレナイが結果推論に偏り、ノカモシレナイが原因推論に偏るという大きな違いを示しつつ、カモシレナイが原因推論に用いられるようになる「特定の文脈」について考察している。木下 (2010:97) によれば、原因を推論することが重要視されていない場合に限りカモシレナイによる原因推論が可能になるという。

(20) とたんに、ジョンストンの猛烈なライナーが二遊間に飛んだ。

大歓声があがった。だれもがヒットと思ったかもしれない。(木下 2010:96 (36))

(21) A: ドライバーが悪いと思う?

B: うーん。この事故の様子だから、無理な運転をしたカモシレナイね。(木下 2010:98 (42))

(20) は皆がヒットだと思ったかどうか重要なのであって、「歓声をあげた」原因の推論に焦点が当たっていない文脈である。(21) は車の事故現場を見ての会話という前提であるが、原因を推論することに焦点が当てられていないので、カモシレナイの容認度が上がるようである。

最終的に木下 (2010) では、次のように原因推論を二つに分けている。

原因推論 1: 真偽不定の事柄について判断することのみ焦点があてられている場合

原因推論 2: 原因が真偽不定であり、それを推論することに焦点があてられている場合

このうち、カモシレナイが原因推論に用いることができるのは、「原因推論 1」のみだという。

以上、先行文献の言説を紹介した。カモシレナイとノカモシレナイは結果推論なのか原因推論なのかによって使い分けられる傾向はあるものの、最終的には、文脈上、原因の解明に焦点が当てられるかどうかによって決まるということであった。

本稿筆者なりに整理を試みると、我々は直接確認していない「雨が降った」という事態の可能性を表現したいとき、「雨が降ったかもしれない」とも言えるし「雨が降ったのかもしれない」とも言える。それぞれの述べ方が要請される状況を考えると、ノカモシレナイとカモシレナイは次のように使い分けられるだろう。

洗濯物を外に干したままで外出した人が、室内から外に出て、道が濡れているのを知覚して「あらやだ、知らないうちに雨が降ったかもしれない」と発話する場合、濡れた道が推論の根拠（あるいは推論の契機）にはなっているが、この文自体は「可能性の存在」を表しているだけであり、事情について推論し、説明するための発話にはなっていない。一方、これまで室内にいて外の天気の変化を知らなかった人が建物の外に出て、道が濡れているのを知覚したとき「あれ、道が濡れている。知らないうちに雨が降ったのかもしれない」と発話し得る。このノカモシレナイ文は与えられた事態の事情を推論した結果として述べられている。ノカモシレナイを用いると、当該文脈に隠れた主題が暗示されることになり「(道が濡れているということは) 知らないうちに雨が降ったということかもしれない」とでもパラフレーズできる述べ方になるためである。

どちらも、根拠になった出来事（推論の契機となった出来事）は「道が濡れていること」であり、推論された出来事は「雨が降ったこと」である。これは出来事間の関係に即してみたとき、結果から原因を推論するものである。それを「雨が降ったかもしれない」とカモシレナイを用いて発話する場合は、事態生起の可能性を述べているだけで、与えられた事態と結びつけることなく提示することになる。一方、「雨が降ったのかもしれない」とノカモシレナイを用いて発話すると、この事態生起の可能性を、与えられた事態に対する事情として提示することになる。

ここに、本稿筆者が、ノの有無による推論の違いについて論考する際に「原因推論」という用語を用いない理由がある。カモシレナイを使うのかノカモシレナイを使うのかは、2 事態間の因果関係の方向性が問題なのではなく、事情として述べるか否かの問題である。事情の内容が、与

えられた事態を引き起こした原因や理由であることが多いため、結果的に原因推論と事情推論がリンクしているように見えるに過ぎない。しかしそうとは限らないことは既に2.2節で述べた。

まとめると、カモシレナイ文とは事態生起の可能性を述べる文であり、与えられた事態と結びつけては語っていないということが重要である。一方、ノカモシレナイ文は準体助詞のノを含むため拡大名詞文になることで隠れた主題が暗示され、「(—ということは)～(という)ことかもしれない」と2つの事態が結びつけられた述べ方になる。こうしてカモシレナイとノカモシレナイについては、事態間の因果関係のあり方に着目した原因推論であるか否かよりも、事情として述べているか否かということの方が重要であることを改めて示した上で、以下では実際に用例からカモシレナイとノカモシレナイの文法的な相違点を確認していく。

4. カモシレナイとノカモシレナイの文法的特徴

ここからはカモシレナイとノカモシレナイの用例を検討し、その文法的特徴を確認する。用例として、『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』のうち、1950年以降に出版された作品から抽出したカモシレナイ文1360例、ノカモシレナイ文492例を用いる¹¹。比較のために『日本語歴史コーパス』(CHJ)を用いて、1950年代以前の使用についても確認した。

まず、カモシレナイとノカモシレナイがそれぞれどのような位置で使用されるのかを調査した。「かもしれない」という現在形の場合と「かもしれなかった」という過去形の場合で現れ方に違いがあるため分けて示すと、現在形「かもしれない」は1262例あり、(22)のように主節述語で用いられる例が996例で78.9%、(23)のような従属節述語の例が244例で19.3%、(24)のような連体節述語の例が22例で1.7%という割合であった¹²。

(22)「君はそれでどっちなんだ。南泉和尚かい。それとも趙州かい」

「さあ、どっちかね。今のところは、俺が南泉で、君が趙州だが、いつの日か、君が南泉になり、俺が趙州になるかもしれない。この公案はまさに、『猫の目のように』変わるからね」【金閣寺】

(23) ヨーロッパ風の洒落たビル。いや、ビルということばは正確ではない。「マンション○○○」「カサ○○○」「ドミ○○○」「○○ハビタション」などと呼んだ方がぴったりくる、高層、高級住宅といった感じだ。知らない人はホテルだと思うかもしれないが、じつは、ここが、ブンの収容されている湘南刑務所なのである。【ブンとフン】

(24) 堀のふちに立つ主君を城壁から守るように、彼もまた、両手を広げて仁王立ちになったのだ。そのままの姿で立ちつづけるトルサンの頭に、自分自身を襲うかもしれない危険はまったく浮んでこなかった。【コンスタンティノーブルの陥落】

一方、現在形の「のかもしれない」は399例見られ、(25)のような主節述語の例が366例で91.7%、(26)のような従属節述語の例が33例で8.3%、連体節の例は見られなかった。

¹¹ カモシレナイとカタカナ書きしている場合は、表記のバリエーション、活用形のパラダイムを全て含めた代表形として用いている。ノカモシレナイの場合も同様である。ある活用に限って示す場合は「かもしれない」「かもしれなかった」のように、ひらがな書きをする。

¹² 「と」によって引用節に入っている場合(例:「雨が降るかもしれないと思った」)は、主節述語の中に含まれている。

- (25) この身震いのするような光景を我々に眩きながら、キチジローは顔を歪めると、突然、口を噤んでしまったのです。そしてまるで記憶の中からあの怖い思い出を追い払うように手をふりました。おそらくこの水礫に処せられた二十数人の信徒のなかに彼の友人や知人がいたのかもしれない。【沈黙】
- (26) それより、婆さんなどというから、よほどの年寄りかと思っていたのが、ランプを捧げて迎えてくれた女は、まだ三十前後の、いかにも人が好きそうな小柄の女だったし、化粧をしているのかもしれないが、浜の女にしては、珍しく色白だった。【砂の女】

両者を比較すると、「かもしれない」は、2割程度が従属節述語として用いられているが、「のかもしれない」の従属節述語としての使用は1割にも満たない。つまり「のかもしれない」の方が主節述語として用いられる割合が高いということになる。この原因として、「かもしれない」は(27)のように逆接文脈で用いられて婉曲的な言い回しになることが多く、これが前置きの従属節使用の多さに繋がっていると思われる¹³。

- (27) 「…仕事をしていないときは世間のみんなと同じごく普通のまともな人間さ」
「世間のみんなはごく普通かもしれないけれど、まともじゃないわ」【世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド】

カモシレナイとは異なり、ノカモシレナイに連体での使用がないのは、ノカモシレナイが事情推論であるためであろう。「事情として述べる (=説明する)」というのは文の述べ方の問題であり、〈説明〉のノダが文末にのみ出現することと並行的に考えられる¹⁴。

次に、カモシレナイには形式自体にテンス対立があり「かもしれなかった」という過去形が使われる。過去形が用いられる位置は現在形の場合とは異なり、ほぼ主節述語に限られていた。「かもしれなかった」は98例中、92例が主節述語として用いられており、「のかもしれなかった」の方も93例中、91例が主節述語であった。それぞれ残りの6例、2例が従属節述語として用いられ、連体の例は双方とも見られなかった。「(の)かもしれなかった」が圧倒的に主節述語に偏るというのは興味深い現象ではあるが、カモシレナイとノカモシレナイにおける相違点ではないので、今回は現象を指摘するのみにとどまる。

¹³ 比較調査として『日本語歴史コーパス』(CHJ)の「明治・大正雑誌」、「明治・大正教科書」から収集した用例と比べてみると、カモシレナイ1625例中、主節述語例:68.1%、従属節述語例:30.4%、連体節例:1.6%、ノカモシレナイ161例中、主節述語例:85.1%、従属節述語例:14.9%であった(連体節例は見られず)。ノカモシレナイが主節述語の使用に偏り、連体に入らないのは明治期から通時的に見ても変わっていないことがわかる。

¹⁴ 「降るかもしれない雨に備えて、傘を持っていく」とは言っても「*降るのかもしれない雨に備えて、傘を持っていく」とは言えないということである。これは、〈説明〉のノダが「*私が書いたのである文章は、誰にも真似できない」のように連体に入らないことと同じように考えられる。

次に、カモシレナイに前接する品詞、及び用言のテンス対立の調査結果を示す。

表 1. カモシレナイの前接品詞と用言の場合の過去・非過去割合調査

前接する品詞	品詞別用例数	品詞別割合	過去・非過去	用例数	過去・非過去割合
動詞	791	58.2	過去	165	20.9
			非過去	626	79.1
形容詞	70	5.1	過去	22	31.4
			非過去	48	68.6
名詞+だ	98	7.2	過去	80	81.6
			非過去	18	18.4
ナ形容詞語幹・ 名詞、その他	360	26.5			
モダリティ形式	39	2.9			
接続品詞なし	2	0.15			
計	1360	100(%)			

前接品詞が用言（動詞、形容詞、名詞+「だ」）の場合は、それぞれ「降る / 降ったカモシレナイ」、「強い / 強かったカモシレナイ」、「雨である / 雨だったカモシレナイ」というテンスの対立についても調査した。さらに、カモシレナイは（広い意味での）体言類にも直接接続する。ナ形容詞語幹「危険カモシレナイ」、名詞「犬カモシレナイ」、その他の助詞類「この問題に対してカモシレナイ」「雨が降ったからカモシレナイ」などがある。「行かなければならないカモシレナイ」などのモダリティ形式に接続するものも少数あった。質問に対する答えとして「かもしれない」のみを答えている例が2例見られたので、これは「接続品詞なし」とした（「彼は来ないんじゃない?」「かもしれないね」のような会話に見られるもの）。

次に、ノカモシレナイで同様の調査を行った結果を示す。

表 2. ノカモシレナイの前接品詞と用言の場合の過去・非過去割合調査

前接する品詞	品詞別用例数	品詞別割合	過去・非過去	用例数	過去・非過去割合
動詞	341	69.3	過去	184	54.0
			非過去	157	46.0
形容詞	46	9.3	過去	21	45.7
			非過去	25	54.3
名詞+だ	76	15.4	過去	18	23.7
			非過去	58	76.3
モダリティ	29	5.9			
接続品詞なし	0	0.0			
	492	100%			

カモシレナイが体言類に直接接続し得るのに対して、ノカモシレナイは用言を体言相当にするノを含むため用言にしか接続しない。

両者の比較において注目すべきは用言のテンス対立である。例えば動詞の場合、カモシレナイでは過去形が2割、非過去形が8割と、圧倒的に(28)のような非過去形に偏っていた。(29)のように過去推論をする例は少数である、ということになる。

(28) 「アメリカに行ってから、その後のことは考えようと思っている」

「どのくらい？」

「決めていないんだ。意外と長くなるかもしれない。半年になるかもしれないし、一年になるかもしれない……」【一瞬の夏】

(29) 里子は慈海の床から、しずかに起きあがると、隠寮を出た。庫裡の三畳で、慈念がどうしているかを見たかったのだった。もう眠ったかもしれない。もし起きていたら、話しかけてみたかった。【雁の寺】

一方のノカモシレナイは、動詞例の半数以上が過去形である。形容詞の場合も、動詞ほど極端ではないものの、同じ傾向が認められる。用言の過去形を受けるノカモシレナイが多いのは、(30)がそうであるように事情推論であるという意味的な特徴に起因するのだろう。ただし(31)のように、与えられた事態を、今後生起しそうな事態の兆候と見る場合は、未来推論になる。

(30) 「何だか、ぶつぶつ、湿疹みたいなのがきちゃった」

「昨日までは何でもなかったでしょ」

「うん、何でもなかった。陽に当たりすぎたのかも知れない」【太郎物語】

(31) が、こうして次第に麻醉の中に落込んでいく於継の様子を見守っていると、加恵は青洲をただ自分だけの子だと云い張った姑に哀れをこそ覚えても、日頃の憎しみや、この実験に自分をも引張りこんだ恨みは薄れていくようであった。ひょっとすると姑は死ぬのかもしれない。【華岡青洲の妻】

名詞述語に目を転じると、カモシレナイとノカモシレナイの間に大きな差異が見られる。カモシレナイは、動詞や形容詞に比して名詞述語の過去形の割合が極端に多いのだが、これはカモシレナイが直接体言類に後置することができ、「犬かもしれない」と言えることから「犬であるかもしれない」という(肯定の)現在形の例が極端に少なくなるためである。「犬ではないかもしれない」という否定形でなければ「犬だったかもしれない」という過去形で用いられることが殆どである。この点については日本語記述文法研究会編(2003:152)に、「「かもしれない」は、動詞やイ形容詞の非過去形・過去形、ナ形容詞の語幹・過去形、名詞、名詞+「だった」に接続する」という記述が見られる。すなわちカモシレナイには断定の助動詞の現在形に接続する例がないと述べているのだが、今回の調査では少数ながら「ナ形容詞語幹+である+かもしれない」(2例)、「名詞+である+かもしれない」(18例)が見られた。以下に1例ずつ示しておく。

(32) 現実主義は卑怯だと三宅は言った。卑怯であるかも知れない。しかし江藤賢一郎はたった一度しか経験し得ない自分の人生を、悲惨な生き方をしたくはなかった。【青春の蹉跎】

(33) 決断が早くできるようになるというのも、もしかすると、深く考えない、という、愚かしさの結果であるかも知れない。【太郎物語】

一方、名詞述語に接続するノカモシレナイは、カモシレナイとは大きく異なり、圧倒的に現在形に偏る。連体形接続になるので「名詞なのかもしれない」という形になる。

(34) 人の流れに身を任せて歩いていると、眼や耳に飛び込んでくる言葉は英語よりスペイン語のほうが多い。

この界限はメキシコ系住民の勢力圏なのかもしれないと思えるほどだった。【一瞬の夏】

- (35) しかしその穴をじっと見ているうちに僕はいくつかの疑問を抱きはじめた。ひとつにはそれがごみを捨てるための穴にしては不必要に大きすぎることであり、もうひとつには今まさに大雪が降りだそうとしていることだった。あるいはそれは何かとくべつな目的のための穴なのかもしれない。【世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド】

上の文は、ある事物（場所や穴）が、ある属性を持つ可能性について述べているだけの文ではない。その事物が、なぜそのような特徴を持っているのかという事情として述べられているためノカモシレナイが用いられている。

以上、前接する品詞ごとにカモシレナイとノカモシレナイを比較した結果、動詞と形容詞に関してカモシレナイは非過去形に接続することが圧倒的に多く、ノカモシレナイは半数以上が過去形に接続していた。これは、カモシレナイが単なる可能性の提示であり、ノカモシレナイが事情推論であることを考えると、順当な結果であると言える。というのも事情推論は、与えられた事態（多くは眼前で知覚できる事態）の事情を推論するものであり、与えられた事態が既実現事態である以上、その事情も既実現事態になることが多いのである。

以上、カモシレナイ・ノカモシレナイの文法的特徴の違いを概観してきたところで、この様相をダロウ・ノダロウのそれと比べてみる。以前、幸松（2016）において、今回と同じコーパスを用いてダロウとノダロウの前接品詞と用言のテンス調査を行ったことがあるのだが、ダロウの場合とはいうと、全用例 3690 例中、用言の過去形接続の例はたったの 297 例であった。さらにそこから会話文における確認要求（「君も行っただろう？」）の例などを除き、過去推論をしている例を探すと、27 例しか見られなかった。これとの比較で言えば、カモシレナイは過去推論の例がまだ多い方だと言える。さらにカモシレナイの過去推論の例を観察すると、以下のように、与えられた事態を根拠にしてその事情を推論しているかのような例も散見され、これらの例はノカモシレナイへ自然に置き換えられるように思えるのである。

- (36) 気のせい最近誰か人が通ったようなにおいがする。飛雪で足跡はかくされているが、加藤にはそう思われた。そっちへおいて行って確かめると、踏み跡らしきものが確かにあった。数日前のもののような気がした。最近誰か人がここへ来たかもしれないと思った。【孤高の人】

- (37) 「二日の正午に博士に会うことになっていた。たぶんそこで僕の中に組みこんだ特殊なプログラムを解くことにしていたんだろう。世界を終らせないためにね。しかし状況は変化してしまった。博士は殺されたかもしれないし、どこかに連れ去られてしまったかもしれない。それが今のいちばんの問題なんだ」【世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド】

- (38) 彼は両手で女を抱きしめ、捻じるように女の顔をあお向けて、接吻をした。それは愛の行為だった。登美子は顔を離そうとしなかった。彼女はもっと激しい愛撫を期待していたかも知れない。【青春の蹉跎】

仮に、事情推論にも読めてしまう (36) (37) (38) をダロウ文で表現しようとする、確信度の高さを度外視したとしても相当に不自然な文になってしまう。文脈を簡略化し、カモシレナイをダロウに置き換えた例を以下に示す。

(36)' 数日前の踏み跡らしきものがあつた。#最近誰か人がここへ来ただらうと思つた。

(37)' 博士に会うことになつてゐたが博士が来ない。#博士は殺されただらう。

(38)' 富美子は顔を離そうとしなかつた。#もっと激しい愛撫を期待してゐたらう。

事情の解明に焦点を当てたものではなく、「来た」「殺された」「期待してゐた」という事態生起の真偽を述べることに焦点がある文だと考えてもなお、(36)' (37)' (38)' は不自然でありほぼ非文であると言つて良い。つまり、ダロウ・ノダロウとカモシレナイ・ノカモシレナイの対立の様相は異なつてゐると言わざるを得ない。与えられた事態の事情を推量しているように読みこめる文では、ダロウを用いると限りなく非文に近くなる。それに対して、カモシレナイとノカモシレナイにはそこまでの厳しい使い分けがない。冒頭に示した(3)では、全く同じ状況の中で推論された二つの事態について、片方はカモシレナイを用いて、もう片方はノカモシレナイを用いてゐた。(36) (37) (38) のような例も含め、これらの作品の筆者が事情であるか否かで両者を厳しく使い分けてゐるのかどうか、疑わしく思える例である。

(36) (37) (38) は、事情推論のように読める文にカモシレナイが用いられてゐた例であつた。実は逆も然りであつて、ノカモシレナイ文を観察していると、一見、事情推論には見えない文が存在してゐる。以下のノカモシレナイ文は、前後文脈の中に事情を明らかにすべき事態がはっきりと与えられてゐないよう見え、どこに波線を打てばいいのかがわからない。

(39) 考えてみると、これも何年も昔の話であり、今は舞台を退いた踊り手さんも多いはずだ。最近、行く機会がないので知らないが、あのせまい食堂も、もうなくなつてゐるのではあるまいか。みんな昔の語り草で、今は「レストラン・フォー・アーチスト」の名にふさわしい立派な食堂に変わつてゐるのかもしれない。【風に吹かれて】

(40) もっとも、大仰な命令の割には、内容は大したことではない。ただ、今となると、その一人一人が懐かしい。都落ちすると、もうめつたに会えないと思う。もしかすると一生でもう会うこともない、という人もゐるのかも知れない。【太郎物語】

(39) (40) は未来推論であるが、「黒い雲」の存在を知覚して「雨が降るのかもしれない」と〈事情推論〉しているタイプとは異なる。話し手の単なる想像を語つてゐるようにも見え、カモシレナイに置き換へても大きくニュアンスが変わることがない。

以上、用例を観察してきた結果、カモシレナイとノカモシレナイは、ダロウとノダロウほど厳しく使い分けられてゐないと言えそうである。事情推論のようにも見えるけれどもカモシレナイが用いられてゐる例((36) (37) (38))、事情推論には見えないけれどもノカモシレナイが用いられてゐる例((39) (40))の双方が見られるためである。ノの有無による意味的対立の鋭さがダロウとカモシレナイで異なつてゐるのは、ダロウとカモシレナイの認識的モダリティ形式としての意味の差異に起因するのではないかと考えられるが、現時点で本稿筆者にはまだ明確な答えが見出せない。

ただし、カモシレナイとノカモシレナイの使用が、全く筆者の自由に任されてゐるわけではない。文法上、ノカモシレナイを用いなければならない(カモシレナイに置き換へられない、もしくは極端に不自然になる)場合がある。以下にその文法的な特徴を挙げておく。

1) ノカモシレナイ文が主題を受けている場合

文中に事情を明らかにすべき事態が主題として顕在している場合、ノカモシレナイを用いる必要がある。例えば以下の(41)(42)は事情を明らかにすべき事態が「一したの」「一(である)のも」のように主題として文中に顕在している。(43)のように前文脈に事情を明らかにすべき事態が現れていて、それを受けて「(その事情は)一つには」と主題としている場合も同様である。これらの例においてはカモシレナイへの置き換えが相当に不自然である。

- (41) 加藤は、いままで少女の姿をうつしていた水溜りのそばに立って、昨夜夜半に眼を覚ましてから、狂ったように故郷を恋うたのは、あの少女が、この町のどこかに住んでいるという彼の心の片隅の記憶が、彼を郷愁にかり立てていたのかも知れないと思った。【孤高の人】
- (42) マスノが岬の道づれでなくなってから、かの女はひとりいばっているふうであった。高等科をおえると産婆学校にいくのが目的なもの、おませなかの女につわりの興味をもたせたのかも知れない。【二十四の瞳】
- (43) どうしてその病に、その時突然とつかれたのか今もって明確ではないが、一つには、見知らぬ土地で不安につぶされそうな自分を支えてくれる強力な何かを、無意識に探し求めていたのかも知れない。【若き数学者のアメリカ】

2) 述語以外に推論の焦点がある場合

述語で表す事態の真偽は既に明らかになっていて、述語以外の部分に推論の焦点が当たっている場合、述語以外に推論のスコープを広げるため名詞文相当の形を取っている必要があるため、カモシレナイは非文になる。

- (44) 彼に冷静さが戻ってきた。冷静さを取り戻せたことに、彼は驚いていた。当然、彼は川村朝子の濃く塗られた唇を、眼の前の少女の唇から連想していた。川村朝子とは、彼が定時制高校の教師を辞める原因になった少女である。あるいは、川村朝子を思い出したためにかえって冷静さを取り戻せたのかも知れなかった。【砂上の植物群】
- (45) 父の詩は、すべて、おおらかな人間讃歌の調べに溢れていた。行助は一月に生れていたのに、父は詩で五月生れにしていた。作詩の環境上、そうしたのかも知れない。【冬の旅】
- (46) ただの純情な恋人同士のように話に夢中になっているわけではない。そうするにはあまりに「彼」は幼なすぎ、七瀬は「彼」を知り過ぎていて。互いへのいとしさだけが熱く燃えさかっている、それが突然であっただけに、別れてしまうと相手がこの世に存在しなくなるような気がするのではないかという、その不安だけで一緒にいたのかも知れない。【エディプスの恋人】

(44)の「冷静さを取り戻した」こと、(45)の「そうした(5月生まれであることにした)」こと、(46)の「一緒にいた」ことは既に確認された事実であり、推論する余地はない。推論されているのは、なぜそうしたのかという点であり、述語以外の成分や従属節に焦点がある。

以下に示す(47)(48)は、「神戸に帰ってきた」「簡単に返事をした」ことは既に確認された事実であり、前文で示された内容(破線部)と「だから」で結びつけることが推論の焦点である。これをカモシレナイに置き換えた途端、「神戸に帰ったかどうか」、「簡単に返事をしたかどうか」を推論する文になり、事実性が変わってしまう。

(47)「神戸にはいつ来たの」 ありふれたいい方をした。

「そう、去年の夏ごろからかしら、——舞い戻って来たのよ。神戸は私にとって、執着に値するところだからよ」

園子は真直ぐ前を向いたまま、「私は過去のことは過去のことだと、簡単にあきらめることができないのよ。だから神戸に帰って来たのかも知れないわ」【孤高の人】

(48) あの日ほくは受話器を握りしめてとにかくあせっていたから、高田馬場で会いたい、ということを行っているつもりで、何か別のこと、たとえば「高田馬場から電話します」などといっていたのではあるまいか——。だから原田瑞枝はあんなふうに簡単に返事をしたのかもしれない——。【新橋烏森口青春篇】

3) テンス・アスペクトにおける変容が起こっている場合

ノダをはじめ、準体助詞ノを含む形式では、ノに前接する事態の動きの側面が捨象され、時間表現上の変容が起こることがある¹⁵。

(49) (なにも考えずに、一日も二日も三日も?)

園子はちょっと小首をかしげたが、(でも、ほんとうにそうかも知れないわね。なにも考えないで歩くことが楽しくて山へ行くのかもしれないわね) 園子は勝手に、そう決めこんでいたようだった。【孤高の人】

(50) 別に、ただ一夜話し合った行きずりの人だ、そう答えながら同時に別の言葉もきく。もしかして好きなのかもしれぬ…… 吟子は自分が心身とも疲れきっていて、馬鹿げたことを考えるのかもしれないと思った。【花埋み】

(51) 彼らはプカプカと浮かんでいるので何も思考していないかのように見えるが、実はそうではない。むしろ、何の抵抗もせずに浮かんでいるからこそ自由に考え悩むことが出来るのかもしれない。【若き数学者のアメリカ】

(49) は、ある人物がしばしば山を訪れている事情について推論している文である。(50) は、既に馬鹿げたことを考えていて、その事情を推論している文であり、(51) も自由に考え悩むことができている状況で、その事情と結びつけることに推論の焦点が当たっている。「行く」のような動作動詞の非過去形はテンス的に未来を表すため「(加藤さんは) 山へ行くかもしれない」というと、今後山へ行く可能性について述べることになる。「考える」「悩む」のような思考動詞や内的情態動詞の場合は、一人称主語・文末で用いられるなどの条件下において非過去形で現在テンスを表すこともある(「私もそう考える。」「私も悩みます。」のように)。しかし、「馬鹿げたことを考えるかもしれない」「悩むかもしれない」のようにモダリティ形式の内側に入った場合はやはり、未来の可能性を述べる文になるだろう。上例のように非過去形で現在テンスを表し得ているのは、述語が表す事態の真偽に推論の焦点がなく、与えられた事態と事情との間の関係性に推論の焦点が当たっているためであり、2 事態をつなぐノカモシレナイ文だからこそ起こる現象である。

ちなみに、以下に示す2つの例は、木下(2010:96)が挙げていた「カモシレナイで原因推論を表すことができない」実例である。

¹⁵ ノダ文における時間表現上の変容については幸松(2007)で詳しく論じている。

- (52) 車のドアを開けてくれる時、ちょっと手を出して肘を支えてくれただけである。再婚者というのは、どうしてもああいう余裕ができてしまうのかもしれない。(木下 2010:96 (28))
- (53) 玉子 (人名: 引用者の補注) と感じが似ているので、お嬢さんですか? と聞く患者があり、玉子は複雑な顔をしていた。自分はあれほどオカメではないと思うのかもしれない。(木下 2010:96 (33))

(52) は「ああいう余裕」と指示詞が使われており、実際に余裕がある状況であることがうかがえる。「再婚者という立場になると、そうになってしまうのかもしれない」とでもパラフレーズできる意味なのだろう。おそらく文の焦点は「再婚者であること」と「余裕ができる」ことを結びつけるところにある。(53) の方は、「自分自身では、オカメではないと思っているかもしれない」と継続相アスペクトを用いればカモシレナイへの置き換え許容度が変わってくると思われる。木下 (2010) は時間表現上の問題については触れていないが、本稿筆者から見ると、どちらの例においても、ノカモシレナイならでは、述語事態の時間性の捨象に関係がある現象ではないかと思われる。

このほか、「なぜか」と「というの」といった接続表現が使われている文など、事情推論であることがあからさまな文脈においてはカモシレナイの使用が不自然になる。

5. 結論と今後の課題

ノカモシレナイは、準体助詞ノに事態生起の可能性の存在を述べるカモシレナイが後置した形式である。ノによって前接部分が体言相当にまとめあげられ、拡大名詞文のような構造になっていることから、「(—ということは) ~ (という) ことかもしれない」と読み取れる構文的な根拠を得て、何らかの主題を受けていることが暗示され、結果的に、文脈中に与えられた事態に対して、その事態はなぜ起こったのか、その事態が何を意味するのかなどの事情を推論しつつ、説明する文になっている。

カモシレナイとノカモシレナイの使い分けとして、カモシレナイは「(単純に) 事態生起の可能性の存在を述べる文」に用いられ、ノカモシレナイは「与えられた事態の事情として、ある事態生起の可能性の存在を述べる文」に用いられる。その意味的な対立が、両者の文法的特徴の相違として現れている。例えばノカモシレナイに連体用法がないのは、連体節で事情を説明することができないためであろうし、カモシレナイに比べてノカモシレナイに過去推論が多く見られるのは、既実現の事態を受けて、それがなぜ起こったのか、それが何を意味しているのかといった事情を想定しようとするからであろう。

こうした特徴から、ノカモシレナイを原因推論の形式だとする先行研究も見られる。しかしカモシレナイとノカモシレナイの使い分けにおいては、原因推論か結果推論かという2事態間の因果関係の方向性よりも、事情を明らかにしようとして述べられているかどうかがより重要であるため、本稿では事情推論の形式であるとした。また、先行文献の中にはダロウとノダロウ、カモシレナイとノカモシレナイの関係が並行的であるとする記述も見られるが、ダロウ・ノダロウが事情推量であるか否かで意味的に鋭く対立していたのに比べると、カモシレナイ・ノカモシレナイは鈍い対立であるということも指摘した。ただし、当該の文中に主題が顕在している場合、主節述語以外の部分に推論の焦点がある場合、時間表現上の変容が起こっている場合などは、拡大名詞文であるノカモシレナイを用いる必要があり、自由に置き換えがきかないことを指摘した。

ノダや周辺形式について研究をしていると、それぞれの形式における準体助詞ノの機能の現れや形式としての文法化の度合いなどが一様ではないと感じる。本稿筆者はもともと、明治以来のカモシレナイ、ノカモシレナイの用例を集め、通時的な分析をしようとしていた。ところが、用例を集めて実際の検討を始めたところ、そもそも推論の種類をどのように考えるべきかということと先行研究を整理する必要を感じ、それに伴って共時的な使用について確認しておかなければと考えるに至り、本稿を著すことになった。カモシレナイとノカモシレナイの通時的な使い分けについては今後の研究課題としたい。

さらに、先行研究をまとめた部分でも記述したように、ノダロウについては日本語教育のテキストや参考書で明確な扱いを受けている。その一方でノカモシレナイに関してはというと、ノダのパラダイムであると自明のこのように述べている参考書もあれば、ノダとの関連性に全く触れられていない論文もある。自分自身の教育経験を振り返っても、学習者が産出した文（発話）を前に、その都度「この場合はカモシレナイ」「この場合はノカモシレナイ」と、合うものを選ぶように指導していた程度であったと思う。今回、使い分けに当たっての文法的な特徴をいくつか示したが、とても教育レベルに即応するものとは言えない。今後、研究が進んで全体像が見えた際には、日本語教育への応用も考えていきたいと思う。

謝辞

本研究は、科研費（課題番号：19163504）の助成を受けた。

【引用文献】

- 庵功雄ほか著・松岡弘監修（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵功雄ほか著・白川博之監修（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 大鹿薫久（1994）「『だろ』を述語にもつ文についての覚書」『日本文芸研究』45巻3号 西学院大学日本文学会 pp.1-15
- 大鹿薫久（1995）「本体把握—「らしい」の説—」『宮地裕・敦子先生古希記念論集 日本語の研究』明治書院 pp.527-548
- 奥田靖雄（1984）「おしはかり（一）」『日本語学』3巻12号, 明治書院, pp.54-69
- 奥田靖雄（1985）「おしはかり（二）」『日本語学』4巻2号, 明治書院, pp.48-62
- 木下りか（2010）「カモシレナイ・ニチガイナイと推論の方向性」『大手前大学論集』11号, pp.91-103
- 金田一春彦（1953）「不変化助動詞の本質：主観的表現と客観的表現の別について」『国語国文』第22巻2,3号
- 国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞—用法と実例（国立国語研究所報告3）』秀英出版
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 仁田義雄・森山卓郎・工藤浩（2000）『日本語の文法〈3〉モダリティ』岩波出版
- 日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法4—第8部モダリティ—』くろしお出版
- 日本語文法学会編（2014）『日本語文法事典』大修館書店
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃（2002）『モダリティ』くろしお出版
- 幸松英恵（2012）「ノダ」文による《説明の構造》未公開博士論文, 東京大学
- 幸松英恵（2015）「〈事情推量〉を表さないノダロウ：準体助詞ノを含む推量形式に見られる2種」『学習院大学国際研究教育機構研究年報』1号, pp.3-22
- 幸松英恵（2016）「日韓の〈過去推量〉をめぐって」韓国日語日文学会2016年度春季国際大会予稿集

- 幸松英恵（2020）「事情を表わさないノダはどこから来たのか—近世後期資料に見るノダ系表現の様相—」
『東京外国語大学 国際日本学研究』1号, pp.162-178
- 幸松英恵（2022）「命令のノダ」とは何か『東京外国語大学 国際日本学研究』2号, pp.164-182
- 渡辺実（1953）「叙述と陳述 -- 述語文節の構造」『国語学』第13-14輯, pp. 20-34

【使用したコーパス】

- 『日本語歴史コーパス (CHJ)』 国立国語研究所 「明治・大正雑誌」「明治・大正教科書」
『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』 1950年以降に出版された54作品 新潮社

（ゆきまつ はなえ 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 准教授）

Kamoshirenai and Nokamoshirenai

YUKIMATSU Hanae

KEYWORDS: Kamoshirenai, Nokamoshirenai, explanation Noda, inference, Epistemic modality

Kamoshirenai is attached to a proposition, to convey the possibility of a certain case situation. On the other hand, *nokamoshirenai* is primarily used to attempt to provide an explanation regarding a given case or situation as to why it happened or what it means.

This difference between *kamoshirenai* and *nokamoshirenai* seems to be caused by a particle *no*, a nominalizer which converts an entire sentence into a noun phrase, turning sentence into a topic-comment-structured sentence.

However, some *kamoshirenai* sentences can be seen in contexts which contains a given situation to be explained. At the same time, *nokamoshirenai* can be also used in the sentence, which does not contain a given situation to be explained. As a result, *kamoshirenai* and *nokamoshirenai* sometimes takes the place of the other.

However, clarification is offered regarding some conditions, in which we cannot use *kamoshirenai* cannot be used and these are instances when the theme or topic exists in the sentence, when the focus of inference is contained in the sentence, and when tense and aspect is used in a special manner.